

3・11の衝撃

3月1日にレポートしたように、こうしてレポートを書き始め、ウェブに投稿して20年になる。ただし2010年8月から14年7月まで「空白」がある。この間に東日本大震災・福島原発事故が起こり、私も定年退職した。激動の時代をレポートしていないのが、残念でならない。

「3・11」についてはレポートしていないが、日本ジャーナリスト会議『ジャーナリスト』に寄稿した原稿「3・11の衝撃」があるので紹介したい。

東日本大震災は4月11日、発生から1か月を迎えた。いまだ被害の全貌すら明らかになっていない。がれきの中を必死に肉親らを捜し続ける人たち、放射能汚染により捜すこともできず、「帰れない町」に途方に暮れる人たち。涙なしに記事を読み進められない。

3・11大震災の報道を通じて、あらためて新聞の役割を痛感した。河北新報は震災で社内での製作ができなくなり、新潟日報で紙面を作って何とか翌朝の新聞を発行できた。阪神大震災のときの神戸新聞を想起させる。地元夕刊紙・石巻日日新聞は、震災翌日から壁新聞を作って避難所などに張り出した。情報が決定的に不足する被災者にとって、手書きの新聞がいかにか貴重な情報源であったことか。

河北新報は震災翌日、「現代日本社会は初めて巨大複合型災害に直面した」と報じた。16年前の阪神大震災と比べても、被災範囲は東北から関東に広がり、都市型と中山間地型の災害が並立している。大地震と大津波、それに「人災」といえる原発事故が重なる。世界有数の地震列島で起きたトリプル大災害、「原発災害」であるが、「想定外」ではすまされない。いまでも強い余震が続く中、広域にわたる被災地の復興は困難をきわめている。一步、また一步、再建につながる長い道のりをともに手を携えて踏み出していこう(河北新報4月11日)。

「フクシマ」は世界を揺るがしている。日本の原発には「安全神話」という幻想があった。復旧の見込みすら立たない深刻な事態は、原子力という統御できないエネルギーの恐ろしさを見せつけている。東京電力と政府の混乱・無策ぶりはもちろん、メディアの原発報道も疑問だらけだ。放射能汚染を「ただちに影響ない」とする楽観的論調、原発推進を前提とした報道が目立つ。福島第1原発事故はチェルノブイリに匹敵する最悪の「レベル7」に2段階引き上げられたが、これでも原発推進の旗を振り続けるのか。特報「危険性40年訴え小出裕章・京大助教に聞く」(中日4月13日)は、事故の現状や原発推進の背景を知るうえで示唆に富む。産官学の「原子力村」に対して、独自の取材・調査による鋭い報道と検証を期待したい。あらためてメディアの責任・あり方が問われている。

(2023年3月9日)